

「チグリジア」

登場人物

真島 柗(23) メンズ地下アイドルにはまるフリータ

河野 日向(5) 柗が誘拐した幼稚園児

河野 咲(32) 日向の母

河野 勇(3) 日向の弟

真島 詩織(47) 柗の母

ひなた(24) メンズ地下アイドルをやる柗の推し

渡辺 蒼(25) 柗の元彼

明日香(21) カフェバイトの同僚

喫茶店の店員

大学生A

大学生B

大学生C

大学生D

アイドル現場のスタッフ

洋服屋の店員

女性A

女性B

女性C

保育士

スーパーの店員

男性A

コンビニの店長

○歩道橋（夜）（数か月前）

夕日が落ち小さな街灯が光る。楽しそうに階段を上る、河野勇（3）とその手を引く河野咲(32)二人の背中を追うように、少し離れた距離でゆっくりと歩く河野日向（5）の姿。咲、勇、階段を上りきる。風が強く吹き咲が後ろを振り返ると日向の姿がない。

○道（現在）

清楚な花柄のワンピースを着て楽しそうに歩く真島柊(23)その隣に眼鏡をかけた地味な見た目をしている渡辺蒼(25)。渡辺は愛想笑いをしている。

渡辺「ねえ、あそこのカフェ入らない？」

渡辺、喫茶店の方に指を指すが柊は見えない。

柊「えー やだ……」

柊、嫌そうな表情で周りをきよろきよろする。

柊「あ！」

急に走りお店の窓の先にあるデザイン
が蛇になっているをグラス眺める柊。

渡辺「ちよつと待って……」

渡辺、柊を追いかける。

柊「（グラスを指しながら）あれすごいかわ

いい、ねえ入ろ」

渡辺「（興味ない）僕は外で待ってるよ」

柊「え、なんで？ 意味わからない」

不機嫌な態度をとる柊。

渡辺「（うつむき）ごめん」

○雑貨屋・店内

少し混みあった店内。柊、商品を眺め
ながら店内の奥の方へ一人でどんどん
進む。ほかのお客さんで進めない渡辺。

渡辺「待ってよ……」

柊、振り返り渡辺を見る。

柊「どんくさなあ」

渡辺「ごめん」

柘、一人で店内の奥まで進む。渡辺から柘の姿が見えなくなる。

○雑貨屋・外

渡辺、お店を出て端に立ち、拳を握る。

渡辺「（イラっと）……」

柘、お店を出て渡辺を見つめる。

柘「外にいるならさ、そう言ってよ」

渡辺「ごめん、でも……」

柘の圧に負けうつむく渡辺。

柘「なに？」

渡辺「なんでもない」

柘「で？ この後どうする？」

渡辺「さっきの喫茶店入りたいんだけど」

柘「えー」

渡辺「お願い」

柘「でも気分じゃないし」

渡辺「たまには僕の意見も聞いて」

渡辺、柘をまっすぐに見つめる。

柘「わかったよ、しょうがないな」

渡辺、どこかすつきりした表情で先頭を歩く。柗、その後ろで不満そうな表情を浮かべる。

○喫茶店・店内

渡辺、ドアを開け鈴の音が鳴り店員がやってくる。

渡辺「二人で」

店員「いらっしやいませ、こちらの席へどうぞ」

柗「ありがとうございます」

柗、店員に笑顔を向ける。渡辺、どこか不満そうにする。柗、渡辺、案内された席に座る。

渡辺「すみません、コーヒー2つお願いします」

店員「かしこまりました」

店員、去っていく。

柗「勝手に注文しないでよ」

渡辺「ごめん」

柗「自分勝手かよ」

渡辺「ごめん、でもすぐ出るから」

柗「意味わからない」

渡辺「……」

柗「普通さ、聞くでしょ」

渡辺「（あきれる）……」

柗「なに黙ってるの？」

渡辺「（無視）……」

柗「ねえ、聞いてんの？」

渡辺「……」

柗「そうやってすぐ黙らないでよ、私が悪い

みたい」

渡辺のスマホが通知で鳴る、スマホを

裏にする渡辺。

渡辺「（覚悟を決める）……」

柗「（舌打ち）」

渡辺「あのさ…… 別れたい」

外で雨が降り始め、雨の音が店になり

響く。

柊「うわ、最悪、（外を見ながら）傘持てる

よね？」

渡辺「（まっすぐ）真面目に聞いて」

柊「……蒼が私なしで生きていけるわけない

じゃん」

渡辺「（圧に負ける）……」

渡辺、うつむく。

柊「いつも言ってるよね！」

渡辺「……」

柊「あんたのことなんて誰も相手にしないよ」

渡辺「柊のことは好きだった、でも……」

柊「（イラッ）でも？」

渡辺「柊という自分がものすごく嫌いなんだ」

渡辺、まっすぐな目で柊に伝える。

柊「（ため息）……」

渡辺「嫌われるのが怖かった」

柊「さつきから何言ってるの？」

渡辺「気づいたんだ、柊に依存してただけな

んだって」

柊「別にいいじゃん、何がダメなの？」

渡辺「僕自身が嫌なんだよ」

柊「蒼は私の言うこと聞いてればいいの！」

渡辺「もうやめたい！」

渡辺、立ち上がる。

柊「！」

渡辺、財布からお金を取り出しテーブル

ルに置く。

柊「ねえ！」

柊、大きな声で渡辺を引き留めようと

する。渡辺、柊に冷たい視線を向ける。

渡辺「そういうところだよ」

渡辺、喫茶店を出ていく。柊、椅子に

座ったまま渡辺の背中を目で追う。近

くにいる、男女グループの音が響く。

大学生A「そんなやつ別れて正解」

柊「……」

大学生B「ほんとそう」

大学生C「自己中すぎ」

大学生D「相手が自分の思い通りになるわけ

ないのにさ」

柊「……」

大学生A「馬鹿は一人がお似合い」

大学生C「ほんとは好かれてなかったんだろ

うな」

柊「（耳をふさぐ）……」

大学生B「もう好きな人いたりして」

男女、笑い声。柊、立ち上がる。

柊「やめて！」

店内、ざわつく。

店員「お待たせしました」

店員、恐る恐るコーヒー2つをテーブル

ルに置き去っていく。柊、顔を手で覆

い隠し座る、2つのコーヒーを見る。

柊「……」

柊、涙を流す。

○道（夕）

柊、雨の中傘もささず歩いている。柊、

立ち止まり、スマホを手に取り「渡辺

蒼」に電話をかけるが出ない。

柊「……」

LINEのトーク画面を開く、メッセージには「電話出る」「なんで出ないの？」
「どこにいるの？」「ダメなところ直すから捨てないで」「ずっと一緒って約束したじゃん」「柊じゃないとダメって嘘だったの？」「会いたい」「嘘つき」と
メッセージと着信履歴が並んでいる。柊、
メッセージを打つ。

柊「……」

柊、「ひとりにしないで」と渡辺に送る。

柊「またひとり……」

柊、その場にしゃがみこむ、すると傘を差しだす、ひなた(24)。

ひなた「大丈夫ですか？」

柊、ひなたが手に持っているチラシが目に入る。

柊「ほつといてください」

ひなた「ほつとけないよ、お姉さんびしょ濡

れだもん」

柊「あなたメン地下でしょ？」

ひなた「はい！」

柊「（ため息）」

ひなた「？」

柊「優しくされても騙されないから」

ひなた「そしたらだまされたふりとか」

柊「はい？」

ひなた「使ってください」

ひなた、柊に自分の傘を渡し走り去る。

柊「ちよっと！」

ひなた、笑顔で柊に手を振る。

柊「（何なの）……」

○柊家の部屋（数日後）（夜）

1DKのマンションの一室、電気もつ

けず暗い部屋のベッドに横になりSN

Sをスクロールしている柊、流れてく

るのは復縁の仕方の紹介、蛇の飼い方、

占い、メンズ地下アイドルやホストの

営業の投稿。適当にスクロールして
ると、ひなたの動画が流れてくる。

柊「あ、この前の」

柊、ひなたの動画を再生する。ライブ
映像が流れ、ひなたは「君だけだよ」
とセリフを言う。

柊「（ドキ）（ボソッと）かっこいい……」

柊、ひなたの写真を見つめ頬が緩む。

柊「いや、メン地下だし」

柊、ひなたのアカウントに「あなたも
どうせ嘘つきでしょ」とダイレクトメ
ッセージを送る。するとすぐにひなた
から「どうでしょ？会って君が判断し
てよ」と返事が返ってくる。

柊「（考える）……」

柊、ひなたに「この前は傘ありがとう。
それだけだから」と送る。

柊「……」

柊、そわそわしているとひなたから
「この前のお姉さん！」「風邪ひかな

かった？」と来る。

柊「優しくしないでよ」

柊、返事をせずスマホを閉じる。

柊「（気になる）……」

○同（翌日）（朝）

柊、カーテンの隙間から入る光で起床し目をこすりながらスマホを開く、ひなたの投稿が目に入る。

柊「え……」

ひなたの投稿には「無視されると傷ついちゃうよね」と書かれている。

柊「これって……私のこと」

柊、横に置いてあるパンダのぬいぐるみを抱きしめる。

柊「……」

柊、ひなたに「無視なんかしてない、ただ変に優しくしないで」とダイレクトメッセージを送る。するとひなたから「急に返ってこないから悲しかった」

「優しくしたいの、君は特別だからと返ってくる。」

柊「特別……」

柊、パンダぬいぐるみを強く抱き締める。

○ビル・全景（数日後）

色んなポスターが貼られごちゃごちゃしている階段を、リボンが大きいピンク色の服を着ている柊が下りていく。

○ライブ会場・ステージ前

大きな音が響いている。柊、人の隙間を上手くすり抜けステージの一番前の真ん中の位置をとる。柊、サイリウムを慣れた手つきで折り、光らす。そしてステージにいるアイドルは「ありがとうございました」とステージを捌けていく、ステージは一瞬暗転しまた新

たなアイドル5人を照らす、黄色い声
援がライブ会場に響き渡る。

柊「きゃー」

柊、ひなたと目が合う、ひなたは柊に
ウインクする。

柊「（ドキ）……」

柊、ひなたに釘付けになる。

○同・廊下

ひなたのアイドルグループ、横に並び
大きな声で「物販始めます」とお辞儀
をする。柊、チェキ券を売っているス
タッフの前に行く。

柊「とりあえず、ひなた2枚ください」

柊、財布から6千円を出しスタッフに
渡す。スタッフ、柊に「ひなたチェキ
券」と書かれている紙を2枚渡す。柊、
チェキ券を大事に握り列に並ぶ。

柊「（ドキドキ）……」

スタッフの「どうぞ」の声と同時にチ
エキ券をスタッフに渡す柗。

ひなた「見つけたときびっくりしたよ！ 来

てくれてありがとう」

柗「あんなこと言われたら来ちゃうよ」

ひなた「あんなこと？」

柗「忘れたの？」

ひなた「覚えてる」

柗「じゃあなんで？」

ひなた「柗ちゃんがあまりにもかわいくて意

地悪しちゃった」

柗「もう（照れる）」

ひなた「ごめんね」

柗「（首を振る）」

ひなた「（微笑む）チエキのポーズ何が

い？」

柗「うーん」

ひなた「俺はハグがいいけど」

柗「そしたらハグで」

柗、照れくさそうにしながらひなたと

ハグのチェキを撮る。

ひなた「次さ、指チューしていい？」

柊「恥ずかしい」

ひなた「ずるくない？」

柊「？」

ひなた「慣れてるくせに」

柊「そんなことないよ」

ひなた「柊ちゃんメン地下行ったことあるよ

ね？」

柊「まあ数回あるけど」

ひなた「その人とは指チューした？」

柊「したけど……」

ひなた「嫉妬しちゃうな」

柊「（キュン）……」

ひなた「柊ちゃんに好かれてた人はいいな」

柊「いや、私なんか……」

ひなた「？」

柊「最近も彼氏に振られたばかりだし」

柊、下を向く。ひなた、柊の頬を手で

覆い目を合わせる。

ひなた「そいつの見る目がなかっただけで柗

ちゃんは何も悪くないよ」

ひなた、柗に頭ポンポンする。

柗「（ドキドキ）……」

ひなた「俺は柗ちゃんのこと好きだよ」

柗「（照れながら）うん」

○道（夜）

柗、ひなたと撮った指チューしている

チェキをスマホの裏に挟みにやにやし

ながら眺める。

柗「運命かも……」

○ライブ会場・楽屋

ひなた、帰る支度をしている。スタッ

フが来る。

スタッフ「さっきの子新規だよな」

ひなた「そう」

スタッフ「あの子はまりそうだな」

ひなた「（にやりと笑いながら）あたりまえ」

○柊家の部屋（翌日）

柊、ネイルをしながらスマホを見る。

柊「うわ！ 最悪」

柊の爪からネイルがはみ出て皮膚についていている。

柊「（ため息）」

柊、ティッシュではみ出たネイルを拭き取る。柊、SNSを開くとひなたから、ダイレクトメッセージが届いていることに気がつき開く、メッセージには「会いたい」と書かれている。

柊「！」

柊、ひなたに「それしたらひなた君クビになっちゃうよ」とメッセージを送る。柊、スマホを持ちながらそわそわする。

柊「夢？」

柊、冷蔵庫から氷を出し口に入れる。

柊「冷たい……」

通知が鳴る、ひなたから「柊ちゃんし

か頼れる人いなくて、でも迷惑だったよね。ごめんね、忘れて」とメッセー
ジ。柊は「そんなことない！いつでも頼って」と送るとひなたから「ありがとう、柊ちゃんはやっぱり優しいな」と返ってくる。

柊「好き」

柊、パンダのぬいぐるみを抱く。

柊「よし！」

柊、ネイルの続きをする。

○ラブホテル街（夜）

柊、ひなた並んで歩いている、柊がひなたの手を握るが、ひなたは力を入れず柊が一方的に握る。柊、ひなたラブホテルに入る。

○ラブホテル・エントランス

ひなた、タッチパネルを慣れた手つきで部屋の選択をする。

柊「（緊張）……」

ひなた「どうしたの？ 違う部屋がよかつた？」

柊「（首を振る）」

○同・部屋

柊、ひなたベッドに座る。ひなた、柊の手の平を撫でる。

ひなた「さっきは手つなげなくてごめんね」

柊「（首を振る）」

ひなた「恥ずかしくてさ」

柊「気にしてないよ」

ひなた「嫌いになってない？」

柊「ならないよ」

ひなた「ファンの子がいなくなっていくのが辛くて、柊ちゃんもいなくなったらどうしようって考えちゃうんだ」

柊「私はずっと好きだよ」

ひなた「ずっと味方でいてね」

柊「うん！」

ひなた、柊に微笑む。

ひなた「頼りになるなあ」

柊「ひなた君のことは私が守るよ」

ひなた「俺のことわかってくれるの、柊ちゃんだけだよ」

ひなた、柊を抱きしめゆっくりベッドに横になる。

柊「（ドキドキ）」

ひなた、慣れていく素振りです。ベッドパネルで電気を薄暗くする。

○ラブホテル街（数時間後）

ラブホテルから出てくるひなたと柊、ひなたは片手にスマホを持ち画面を見ている。

ひなた「今日は会ってくれてありがとう、またね」

ひなた、柊と目も合わせず、逃げるように去る。

柊「待って……」

柊の声は周囲の声でひなたに聞こえない。

○柊家の部屋（数日後）

柊、ソファアーの上でひなたのSNSを見ながら氷を食べる。

柊「ひなた君、今何してるのかな」

窓の外からカップルの笑い声が聞こえる。

柊「（ため息）……」

通知が鳴る。

柊「……（通知を開く）」

ひなたから「今から会わない？」とメッセージ。

柊「今から！ えー どうしよ」

柊、クローゼットを開ける。服をあれでもこれでもと出す。鏡の前に立つ。

柊「（花柄のワンピースを合わせる）違う（古着を合わせる）絶対違う（ハット）」

柊、ひなたのメッセージに「会いた

い！」と返事する。

柊「今日は大人ぽく」

柊、髪の毛をポニーテールにする。

柊「どう？」

パンダのぬいぐるみに話しかける。

○駅・改札口前（数時間後）

改札前で待つ柊。ひなたが遅れてやっ

てくる。ひなたを見つけ手を振る柊。

ひなた「お待たせ」

柊「（髪を揺らしてアピール）」

ひなた「ん？」

柊「ねえ、気づかない？」

ひなた「何が？」

柊「髪の毛！」

ひなた「あ！今日は結んでるんだね」

柊「それだけ？かわいいとかは？」

ひなた「いつもと違うから緊張しちゃってさ」

柊「（にやけながら）なんだ！」

○店内

ひなたから少し離れたところで服を見ている柊。柊、店員に声をかけられる。

店員「気になるものございますか？」

柊「いえ（ひなたの方を見て）付き添いなので」

店員「そうなんですかね！ 彼氏さんですか？」

柊「ここだけの話……彼アイドルなので」

店員「すごい！ 漫画の世界みたいですね」

柊「運命なんです」

ひなた「（聞こえないふり）」

ひなた、スマホを見る。

○店・外観

紙袋を持つひなたと柊がお店から出てくる。

ひなた「（紙袋を少し持ち上げる）ありがとうございます」

ひなた、満面の笑顔を柊に見せる。

柊「いいのいいの」

ひなた「俺にとって柗ちゃんは運命の人だよ」

柗「（嬉しそうに）うん！」

ひなた「ごめん、この後予定入っちゃって、

もう行かなきゃ」

柗「え、やだ」

ひなた「ごめんね」

柗「もっと一緒にいたいよ」

柗、ひなたの袖をつかむ。

ひなた「でもこの後あるからさ」

柗「その服高かったんだよ」

ひなた「ありがと」

柗「そうじゃなくて」

ひなた「またすぐ会えるようにするから」

柗「（不服そうに）絶対だよ」

柗に掴まれている袖を離すひなた。

ひなた「じゃあ」

柗「……（ひなたの背中を目で追う）」

○道

柗、信号を待つ。

柊「……」

柊の前で信号を待つ日向。幼稚園バッグに書かれている、ひなたという名札に目が行く柊。

柊「（気になる）……」

信号が青に変わる。日向が歩き始めた瞬間日向のポケットからどんぐりが落ちる。

柊「！」

柊、どんぐりを拾う。

柊「落ちたよ！」

日向、柊の方を見る。

日向「（ハッとすする）」

信号が点滅し始める。咲、振り返り信号を渡り切っていない日向に気がつく。

咲「早く！」

日向、走り信号を渡りきる。信号が赤に変わる。柊の手には顔が描かれているどんぐり。

柊「（どんぐりを見つめる）（どうしょ）……」

○柊家の部屋

柊、どんぐりとコンビニの袋をテーブルの上に置く。

柊「もう何もわかってない……」

柊、ソファーに座りパンダのぬいぐるみを抱く。

柊「（スマホを見る）……」

ひなたに送った1時間前の「次いつ会える？」「返事くらいすぐしてよ」のメッセージが未読のままになっている。

柊「返事もないし……」

柊、スマホを置きコンビニの袋から氷を出し食べ始める。テーブルの上のどんぐりが床に落ちる。

○デパート（翌日）

柊、エスカレーターに乗る、後ろに20代の女性2人組が乗る。

柊「……」

女性A「夜だけなんて怪しいでしょ」

女性B 「でもすごく優しんだって」

柊 「……」

女性A 「なんか隠してるんじゃない」

女性B 「えー やめてよ」

柊、イヤホンを鞆から取り出し耳につける。

柊 「（聞きたくない）……」

柊、エスカレータを下りる。通知で柊のスマホが鳴る。

柊 「（通知を開く）」

ひなたからの「明後日の夜とかどう？」とメッセージ、柊は「なんで夜なの？」と返事をする、ひなたから「昼は用事があつて」と返ってくる。

柊 「……」

○柊家の部屋（数日後）（夕）

柊、鏡の前で念入りに身だしなみを整える。

柊 「ひなた君とは運命だもん」

柊、時計を見る。

柊「（ドキドキ）」

○道

柊、頬を緩ませながら歩く、通知でスマホが鳴る。

柊「？（スマホを見る）」

通知を開く、ひなたから「もう会えない」とメッセージ。

柊「え？ どういうこと……」

ひなたから「運営にばれて、次やったらクビって言われた、ライブでは会えるから」とくる。

柊「なんでよ……」

柊、ひなたに「秘密で会えばいいじゃん！」「特別なんだよね？ 運命でしょ？」と送るが返事がない。

柊「もうやだ……」

柊、しやがみこみ涙を流す。

柊「（涙を袖で拭う）……」

○居酒屋・店内

若い女性が横に座り楽しそうに話しているひなた。

ひなた「ほんとバカだよな」

女性C「へ嘲笑いながら」やめなよ」

ひなた「笑っちゃうくらいだまされてくれるからさ」

涙でメイクと髪型がボロボロになって
いる柊、店内に入る。ひなたと女性を
見つける。

柊「！」

柊、隠れて盗み聞きする。

女性C「それにしても、運営にばれたとかよ
くそんなうそ出てくるよね」

柊「……」

ひなた「大体こういつとけば納得するから」
女性C「運営あんたのくせに」

柊「え……」

ひなた「オタクは知らないんだから、こうい
うのはうまく使わないと」

ひなた、女性の足を触る。柊、ひなたの目の前に行き、ひなたの腕をつかむ。

柊「どうということ！」

ひなた「どちら様？」

柊「ごまかさないで！」

ひなた「離してください」

柊、ひなたの腕を離す。

柊「特別って嘘だったの！？」

ひなた「（ため息）」

柊「嘘つき！」

ひなた「会ったときに言ったら、だまされた

ふりしろって」

柊「意味わからない」

ひなた「なに？ 本気にしちゃった？」

柊「えっちだってしたじゃん！」

ひなた「彼女とかセフレにでもなれたつもり？」

柊「……」

ひなた「……」

ひなた「（笑いながら）お前なんかセフレ以

下」

女性C「ちよっとやめなよ」

周りの客からの視線を感じる柊。

柊「……」

ひなた「言わせてもらうけどさ、お前みたいな悲劇のヒロインぶってて自己中でブスな奴眼中にないんだわ」

柊「最低……」

柊、スマホ裏に挟んでいる、ひなたのチエキを出し地面に投げ踏みつける。

ひなた「あらあら」

お店を飛び出す柊。

○道（夜）

涙を流しながら歩いている柊。

柊「（虚ろに）……」

保育士声「ひなた君、お母さん来たよ」

柊「？」

柊、幼稚園を見つける。

柊「ひなた……」

日向、咲、勇が目に入る終。日向、勇、
咲、幼稚園を出て歩きはじめる。終、
その後ろをついていく。

咲「勇君、ママと手つなごうか」

勇「うん！」

咲、勇、手を繋ぐ。二人から少し距離
ができていく日向。

日向「（小さな声）僕も手つなぎたい」

小さくて日向の声は咲には聞こえてな
い。

咲「勇君、今日はハンバーグだよ」

勇「やった！」

日向「（小さな声）僕オムライスが食べたい」

咲「楽しみだね」

勇「うん！」

日向、うつむく。終、ゆっくり日向と
の距離を詰める。咲、勇、歩道橋の階
段を上る。日向もゆっくりついていく。
咲、勇、繋いだ手を揺らしながら楽し

そうに階段を上り、曲がり角の物陰に入る。

日向「（寂しそうな表情）……」

柊、日向の口をふさぎ抱きかかえ走る。

日向、騒がず抵抗もしない。押さえていた手を離す柊。

○柊家の部屋

柊、玄関で抱きかかえていた日向を下ろす。

柊「怖くないの？」

日向、静かに頷く。

柊「とりあえずシャワー浴びようか」

日向「（不安）……」

柊、日向の靴を脱がせ脱衣所に連れていく。日向、服を脱ぎ始める。日向の身体をじろじろ見る柊。

柊「……」

柊、服を脱ぎ始める。

柊「お姉ちゃんと一緒に入ろうか」

日向「（頷く）……」

お風呂場に入る日向と柊。シャワーで身体を流しボディースープを出し身体を洗い始める日向。

日向「……」

柊、日向の肩から腕まで撫でるように触りはじめる。日向の腕を掴み自分の胸までもっていく柊。

柊「（日向を見つめ）私のこと好きになって家のインターホンが鳴る。」

柊「！？」

柊、はいと言いながら風呂場を出ていく。

日向「（怖い）……」

日向、震えた手を止めようと腕で押さえる。Tシャツにショートパンツで玄関から、宅急便の人から荷物を受け取りドアを閉める柊。

柊「（思い出し）……何してるんだ子供に」

荷物を床に置き、キッチンに立ち冷蔵庫
庫を見て豆腐を出す柗。

柗「これだけか……」

味噌汁とおにぎりを作る柗。お風呂か
ら出てくる日向。

柗「そのソファ座ってていよ」

日向、ソファに座る。味噌汁とおに
ぎりを日向の目の前のテーブルに置く。

柗「これしかなくてごめんね」

日向「（首を振る）」

日向、何も言わずおにぎり味噌汁を
食べる。

○スーパーマーケット（翌日）

柗、スマホを確認しながら鶏肉、玉ね
ぎ、ケチャップをかごに入れる。

○柗家の部屋

腕、足を衣類で固く結ばれソファで
横たわっている日向。

日向「（床に落ちているどんぐりをじつと見る）」

○スーパーマーケット

お菓子コーナーで子供用のチョコを手
に持つ柊。

柊「（悩んでいる）……」

店員声「珍しいもの買ってどうしたの？」

柊の背後から声が聞こえる。

柊「（動揺）親戚が来てて」

柊、後ろを振り返ると店員がおばあさ
んに話しかけている。

柊「なんだ……（ホッと）」

○柊家の部屋（夜）

暗い部屋で真剣にスマホを見ている柊。

柊「……」

「誘拐事件」と検索しスクロールし続
ける柊。

柊「ない……」

○コンビニ（数日後）

ATMで残額を確認する柗。

柗「ない……入ってない……」

母、真島詩織(47)に「仕送は？」とL

INEを送る柗。

○柗家の部屋

日向の手足を縛っている布をほどき、

キッチンから作ったオムライスを日向

の前のテーブルに置く柗。

柗「オムライス好きだよね？」

日向「（頷く）」

柗「召し上がれ」

日向、手を合わせオムライスを食べる。

柗「あまり料理しないから、おいしくなかつ

たらごめんね」

スプーンを置く日向。

柗「おいしくない？ まずかった？」

日向「（首を振って）おいしい」

柗に向かい歯を出さず微笑みかける。

柊「（嬉しい）」

日向を抱きしめるが、すぐに離れる柊。

柊「ごめん」

日向「（きよとんとしたあと空気を読むよう

微笑む）」

柊「（安堵）」

柊、日向の頭を撫でる。

○日向の幼稚園の前へ道（数日後）

柊、外から幼稚園の様子を伺う。咲、

勇が幼稚園に入っていく。

柊「！」

柊、身を隠すように電柱の後ろに隠れる。幼稚園の先生と話す、咲の声が聞こえてくる。

咲（声）「あの子がいない方が楽なのよ」

柊「……」

柊、聞こえるように幼稚園の方に少し近づくが、通りかかった人に不審がられる。

柗「……」

柗、顔を隠しその場から急いで離れる。
柗のスマホに「母」からの電話がかかってくる。

柗「（びっくり）」

柗、電話に出る。

柗「もしもし」

詩織（声）「あー もしもし柗？」

柗「どうしたの？」

詩織（声）「仕送りなんだけど、もうしないから」

柗「え？ なんで？」

詩織（声）「あんた今仕事は？ 就職はどうなったの？」

柗「……」

詩織（声）「就活まだ頑張るっていうから仕送りしてたけど、そうじゃないならもうあきらめてこっち帰ってきなさい……」

柗、電話を切る。

柗「（ため息）」

○柊家の部屋（夕）

柊、氷をがりがり食べている。

柊「あーもうどうしよ」

頭を抱える柊。

日向「（心配そうに）大丈夫？」

柊「なんでもないよ、ごめんね」

日向「そんな氷食べたら、お腹痛くなっちゃ

うよ」

柊「心配してくれてありがとう」

日向「（微笑む）」

柊「頑張るしかないか」

日向「（頷いて微笑む）」

柊「（頷いて微笑む）」

○コンビニ店内（数日後）

制服姿でレジに立つ柊。

柊「いらっしやいませ」

缶のお酒数本を持ち柊のレジまでもつてくる50代男性。商品のバーコードを読む込む柊。

柘「（小さな声）年齢確認ボタンお願いしま
す」

男性A「（強めに）え？ 何？」

柘「年齢確認ボタンお願いします」

男性A「聞こえねえよ」

柘「（息を吐く）」

男性A「おい！ なにため息ついてんだよ」

柘「（小さな声）すみません」

男性「聞こえませーん」

柘「（小さな声）クソじじい」

男性A「（怒り）今なんってた？」

柘「（小さな声）聞こえてんじゃん」

異変に気がついた店長が出てきて男性
「すみません」に頭を下げる。

店長「君も謝れ」

柘「（嫌）」

浅く頭を下げる柘。

○柘家の部屋

「店長」からの電話が鳴り続くが無視する柗。

日向「ずっと鳴ってるよ」

柗「もういいの」

日向「（分からない）……」

柗「店長」の連絡先をブロックする。

柗「（ため息）」

日向「（心配）大丈夫？」

柗「頑張れなかった」

日向「頑張ってるよ、お姉ちゃんは」

柗「（困った）……」

日向「僕のせい？」

柗「なんで、違うよ……お姉ちゃんがしつかりしてないから」

日向「ごめんなさい」

柗「悪いことしてないのに謝らなくていいんだよ」

日向「……」

柗、そっと日向の頭を撫でる。

○カフェ・店内（数日後）

シャツに黒のズボン、カフェのエプロンをつけ配膳をしている柊。店内にはケーキを食べている人、パソコンで作業しているお客さんのみで、落ち着いている。柊は同僚の明日香(21)とおしやべりを始める。

明日香「この前彼氏と喧嘩したんだけど、全然謝ってくれなくて、なんで男の人ってすぐ謝れないの」

柊「大変だね、日向は……（ハッと）」

明日香「？」

柊「（動揺）何でもない」

明日香「日向って彼氏？」

柊「（動揺）あーうんまあそんな感じ、あ！

レジの計算しないと」

柊、ごまかしながら明日香から離れる。

○柊家の部屋（数日後）

一緒にテレビを見る日向と柊。テレビ

に仲の良さそうな家族が流れる。うつ

むく日向。

柊「家族に会いたい？」

日向「僕には姉ちゃんがいるから」

日向、顔が書かれているどんぐりを見

つめる。

柊「あ、それ」

日向「……お姉ちゃんが拾ってくれた」

柊「そっか、名前同じ……」

日向「僕が書いたのこの顔、上手でしょ」

柊「上手、誰を書いたの？」

日向「（困る）……」

柊「言いたくなかったらいいの」

日向「ごめんなさい」

柊「（ごまかすよう）日向君さ、なんの動物

が好き？」

日向「（うそ）パンダ」

柊「ほんとに？」

日向「……ほんとはへびが好き」

柊「そっか！ お姉ちゃんと一緒」

日向「（嬉しい）」

柊「ちよっと待ってて」

× × ×

蛇のぬいぐるみを持ち帰宅する柊。

日向「（帰ってきてきて安心したが不安げ）ごめ

んなさい」

柊「ん？ なんで？」

日向「困らせて気を遣わせたから……僕のこと

と嫌いになったよね」

柊「なっていないよ！ 私は日向君の味方だし

少しでも安心させたくて」

日向「……」

柊「不安にさせてごめんね」

日向「（首を振る）」

柊「見て！（蛇のぬいぐるみを見せる）これ

からは私とこの蛇の太郎君が日向君のこ

と守るからね」

柊、日向にぬいぐるみを渡す。ぬいぐ

るみを抱きしめる日向。

日向「（嬉しい）ありがとう」

○カフェ・スタッフルーム（翌日）

柊、椅子に座りスマホで「誘拐された子供」と検索する。

明日香「なに調べてるの？」

後ろから声をかけられる柊。検索ワードが見えてしまう明日香。急いでスマホを裏にしてテーブルに置く柊。

柊「なんでもない」

明日香「ふーん」

○柊家の部屋（翌日）

インターホンが鳴り、急いでドアを開ける柊。

柊「お母さん」

詩織「入るよ」

柊「待って待って、ちよっと待ってて」

ドアを閉め慌てながら、日向の手足を縛りクローゼットに入れる柊。玄関のドアが開き、詩織が部屋に入ってくる。

柊「ちよっとお母さん」

詩織 「仕事はどうなってるの？」

柊 「カフェでバイトしてる」

詩織 「負け組になりたいの？」

柊 「お母さんがいつも言ってる、その負け組とか勝ち組って何？ 私は今のままで十分幸せだよ！」

詩織 「ひなたってアイドルに遊ばれていることが？」

柊 「！」

詩織 「何が幸せよ」

柊 「（怒り）なんでひなたのこと知ってるの！？」

詩織 「なんのためにあなたに色々やらせたと思ってるの？」

柊 「私は……そんなことよりもっと褒めてほしかった！ 認めてほしかった、パンダのぬいぐるみだって……ほんと蛇の方が好きだし」

詩織 「そんな子供みたいなこと言わないで！」
柊 「……」

詩織「お母さんは心配なの、柊がちゃんと生きていけるか」

柊「……」

詩織「早く手に職つけなさい、今のあなたのことなんて誰も好きになるはずないんだから」

柊「（小さな声）そんなことない」

詩織「お母さんの言ってることわかるよね？」

柊「はい……」

クローゼットからドンと音が鳴る。

柊「（ごまかす）隣の人うるさいんだよね」

詩織「……分かってくれたなら、また仕送りしてあげるけど、早く何とかしなさい、できないなら家に連れ戻すから」

柊「はい」

詩織、満足げに帰っていく。

柊「（ハッと）ごめん、信じてないとかじゃなくて……」

クローゼットゆっくりを開ける柊。歯を出さず微笑んで見せる日向。

日向「僕気にしてないから、大丈夫」

床に涙がたまっていることに気がつく
柊。

柊「（何も言えない）」

○柊家の部屋（数日後）

ソファーでのんびりする柊と日向。

「母」から電話が来るがスマホを伏せる柊。

日向「お母さんのこと嫌い？」

柊「うーん、好きだけど嫌いでも悪く言われるのは腹が立つ、嫌いになれないって感じかな？」

日向「難しいね」

柊「そうだね、人ってわがままだから、日向君は？」

日向「分からない、僕はいらな子だから、

お母さんは弟の方が好きなんだ」

柊「弟にお母さん取られちゃったんだね」

日向「お母さんも弟も大嫌い」

柊「……」

日向の頭を撫でる柊。

日向「……」

柊「私のこと好きになって」

○道（数日後）

雨の中傘をさし歩く柊。

○柊家の部屋

玄関を開け部屋に入る柊。

柊「ただいま」

部屋が静まり返っている。部屋を見渡すが日向の姿がなく、家を飛び出す柊。

○道

雨に濡れながら走り回る柊。びしょ濡れの日向の姿を見つけ、日向のもとに駆けつけビンタする柊。

柊「心配させないで！」

日向「（手を後ろに隠す）ごめんなさい」

柊「とにかくよかった」

日向「……」

柊「家入ろ、風邪ひいちゃう」

○柊家の部屋

タオルを巻き日向を拭く柊。

柊「風邪ひかないといいんだけど」

日向、隠していた手を出す、手にはチ

グリジアの花。

日向「（花を柊に差し出し）大好きだよ！」

差し出された日向の手を握る柊。

柊「（嬉しい）ありがとう！ 私も大好きだ

よ」

柊、日向に満面な笑みを見せると、日

向は、初めて歯を出し笑う。

○カフェ・スタッフルーム（翌日）

静かな空間に柊と明日香がいる。

明日香「昨日、柊ちゃんのこと見かけたんだけど」

柊「……？」

明日香「一緒にいた男の子誰？」

柊「（戸惑う）」

電話がかかってきて気まずそうに出る
柊。

日向（声）「助けて」

カフェを飛び出す柊。

明日香「ちよつと！ どこ行くの！？」

○柊家の部屋

息を切らしながら部屋に入る柊。床に
顔が赤くなって倒れている日向を見つ
け駆けつける。

柊「日向！」

日向のおでこを触る柊。

柊「熱い……昨日あんなに濡れたから」

日向を抱きかかえ、ベッドに寝かせ布
団をかけ離れようとするが腕を日向に
掴まれる柊。

日向「どこにも行かないで」

柊「どこにも行かない、ここにいるからね」

柊、日向の頭を撫でる。

× × ×

日向、寝息立て寝ている。柊、日向を見守る。

柊「（小さな声）病院にも連れてってあげられなくてごめんね」

日向「（寝言）お母さん」

柊「……」

日向「（寝言）（苦しそう）お母さん、お母さん、お母さん」

柊「……」

柊、SNSを開き「河野日向」と検索する。すると母親のアカウントを見つる、スクロールすると日向の写真と名前、特徴が書いてあり探していますと大きな文字で書かれた投稿が並んでいる。

柊「……（小さな声）なんだ、愛されてるじゃん（涙を流す）」

○同（翌日）

日向、風邪はよくなりぬいぐるみで遊んでいる。飾ってあるチグリジアが枯れている。日向を見つめる柊。

日向「どうしたの？」

柊「……ねえ日向君」

日向「？」

柊「私のこと好き？」

日向「好き！（笑顔を見せる）」

柊「（わざと怒りながら）そうやって笑って相手のほしい言葉を言えば嫌われないって思ってるんでしょ！」

日向「そんなんじゃ」

柊「笑顔だって自分を守るために偽物なんですよ！」

日向「（違う）……」

柊「日向には私が必要ないんでしょ」

日向「僕はお姉ちゃんがいい」

柊「大人をからかうのもいい加減にして！」

私は騙されないから！」

玄関のドアが開き警察が入ってくる。

日向「！」

警察は柘に手錠をかけ連れて行こうとする。知っていたかのように動じない柘。

日向「（泣きながら）行かないで」

柘「あなたのことなんて好きじゃない（涙を

隠し）」

日向「やだ！」

柘「……」

日向「ひとりにしないで！」

柘、警察につられ家を出る。

○刑務所（数か月後）

グレーのジャージに髪や肌がボロボロになっている柘。手紙が届く、宛先は日向から。

柘「……」

手紙を開く柘。

日向（声）「柊ちゃんへ、お元気ですか？

僕は元気だよ、柊ちゃん僕を誘拐してくれてありがとう、柊ちゃんに会いえて僕は幸せ」

柊「……」

日向（声）「愛そうとしてくれてありがとう、怒ってくれて、ほめてくれてありがとう、守ってくれてありがとう、愛してくれてありがとう、嘘ついてくれてありがとう、家族になってくれてありがとう」

柊「（咽び泣く）」

日向（声）「柊ちゃんを守れなくてごめんなさい、可愛くて優しい柊ちゃんの世界で一番大好きだよ」

柊「（小さくなり泣いている）」

手紙の端にどんぐりの絵に顔が書かれている。

終わり